

～「ここすき！」学びの記録～

お母さんはわたしの「安全基地」

* Nさんは、初めて見る「新聞遊び」に興味をもって近づいていきました。
でも、慎重なNさんは、いきなり枠の中に入って遊び始めずに、すこし離れたところから、じっと観察しています。
そのNさんの「観察を通した学び」をお母さまは繊細な配慮で支えていました。



1) 最初はNさんの手をとって安心感を伝え、不安な心を支える「心の杖」になっています。



2) Nさんが一歩前に出ると、今度は後ろから優しく支えています。



3) お母さんと一緒なら、安心して遊ぶことができました。



4) 何度も「いないいないばあ」を繰り返して「見えなくなっても、見ていてくれる」ことを確認しています。

子どもの遊びは、実際に「する」前に、「見る」段階があります。
「見る」ことをしている時、脳は自分で体験している時と同じように活性化しています。
つまり、「見る」ことを通して、子どもはその行為を「学んでいる」のです。

初めてのヒト・モノ・場に出会う時、子どもはいったん目を逸らして、信頼できる人にくっきます。
そして、安全を確保した後で、恐る恐る、その新たな対象を観察しています。
この「くっつく行動」こそが「愛着＝アタッチメント」であり、子どもの「学びと育ちを支える土台」なのです。

お母さんの存在に支えられながら、Nさんは新しい環境を探索し、次第に行動範囲をひろげていきました。
いつも温かく見守ってくれるお母さんや保育者のまなざしを今、心の中にたくさんたくわえている真っ最中なのです。

その証拠に、この日、Nさんは何度も「いないいないばあ」を繰り返していました。
「いないいないばあ」という遊びは「見えなくなっても、見ていてくれる」ことを確認する遊びなのです。
そうしているうちに、「自分を温かく見守ってくれる人のまなざし」が、自分の「心の中に住む」ようになります。

すると、「一人でいられる力」が育ちます。つまり、子どもの自立とは、「親から離れられるようになること」ではなく、
「自分を温かく見守ってくれる人が心の中に住むこと」なのです。

そのNさんの心の育ちに優しく寄り添うように、お母さまはいつでも逃げ込める「安全基地」となり、
前や後ろからいねいに、Nさんの「観察を通した学び」を支えていらっしゃいました。